鹿児島大学リポジトリ
Kagoshima University
Repository

ムソビシの時代:1821年－1842年のシャムによるクダー占領期（part.2）

著者	黒田 景子
雑誌名	鹿児島大学総合教育機構紀要
巻	4
ページ	27-46
発行年	2021-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031618

ムソビシの時代：1821年－1842年のシャムによるクダー占領期 (part.2)

黒田 景子

キーワード：マレー、シャム、歴史認識

概要

本稿は第２号掲載論文の後半である。

19世紀初頭のマレー半島中部において、英国東インド会社（EIC）の拠点ペナンは有力な交易中心としてアヘン貿易を含み周囲の港市を引きつけた。シャム南部の有力港市ナコンシータマラートは政治力ある領主ノーイが華人系領主を持つソンクラーと対向して半島西側への勢力拡大をもくろんだ。

文字史料によると、1821年11月21日にナコンシータマラートはクダーを占領し、多数の捕虜を連れ帰った。タイ史料ではナコンシータマラートはシャム中央宮廷に朝貢国クダーがブンガマスの貢納を怠ったこと、ビルマからシャム掃討の協力をうけたことをシャムへの背反とみなして懲罰の理由とした。一方クダーとペナン EIC にとってはナコンの攻撃は奇襲であり、クダースルタンはペナンに逃げ込み、クダーから多数の避難民が流入した。事件に関してはシャム側の認識とクダーと EIC 資料の認識は齟齬がある。クダーと EIC はナコンのノーイの計画であると断じている。ナコンシータマラートはクダーとさらに南方のペラを自らの直轄領とすることをシャム宮廷から承認され、ライバル港市であるソンクラー領主の動きを封じた。

1822年のクダー攻撃から1844年までのナコンによるクダー占領期をクダーでは「ムソビシの時代」と呼び、苦難の歴史記憶は文字記録をもたない内陸農村の伝承としていまも受け継がれている。民衆はシャム兵士によって殺戮されるか、捕虜となってシャム側へ移送された。ノーイの息子たちの仏教徒領主の統治下のクダーでは反シャム的機運が高まり、占領直後からクダースルタンの親族やクダー民衆による蜂起が相次いだ。

クダー奪還のため、反シャム蜂起を試みたトゥンク・クディンの乱（1832）は失敗に終わったが、1838－39年のモハマッド・サードとワン・マット・アリの乱はクダーの外のソンクラーを包囲、パタニの一部に迫った。ワン・マット・アリはクダー西海岸のランカウィー周辺の海域でシャム側兵士のムスリムとも戦った。この戦いではジハードも叫ばれ、クダー以外からのムスリム義勇軍の参加も報告され、戦乱は一時ソンクラーの包囲まで至った。

ナコン軍の反撃によりこの反乱も鎮圧されたが、首都のラーマ３世王は南部の状況が首都に伝わらず、情報収集により南部の国主たちが禁制のアヘン交易にかかわっていること、意図的に情報を提供しないことに不快感を示した。

その後1839年にノーイが急死したため流れが変わった。シャム中央は仏教徒によるクダーのマレームスリム支配を諦めた。クダーは分割統治された上で、クダースルタンの親族とスルタンの復帰がかなった。

この「ムソビシの時代」については戦いに参加した村落の英雄などの記憶が数多く残る。それらは、EIC が集めた詳細な記録とは異なり、文書化されたものはほとんどない。しかし、村落での反シャム反乱の記憶は村に残って受け継がれた。

この民衆の記憶伝承としての「文字化されていない歴史記憶」はクダーの歴史にとって重要な情報が含まれている。

内陸農村部の記憶伝承調査により、クダー農村マレー人ムスリムには以下のような歴史認識があることがわかった。一つはシャムへの恐怖と悪感情が長く残っていること。二番目はクダーが異教徒に占領されたことがマレー世界のムスリム戦士がアチェやパタニ、などから義勇軍として参加する契機となり、反シャム、ジハードとしての戦いを称する動きを生んだ。そして、最後に、文字記録のない歴史伝承として伝えられた「ムソビシ」の英雄譚は、なかには伝承が飛躍した物語に発展する例もあるが、クダー民衆が「シャムと英国による植民地支配時代」を意識し、公的歴史ではない「私たち自身の歴史」を求めていることもわかった。研究者が解明して示す「史実」に満足しない人々による「歴史の実践」が持つ意味はまた現代を映す鏡である。

Ⅳ．ナコンシータマラートの勢力拡大（承前）

２.「ムソビシ」の始まり：クアラ・クダーへのナコンシータマラートの攻撃

ナコンの国主ノーイによるクダー攻撃は入念に計画されたものである。1819年、クダースルタンの弟のトゥンク・アンボン（Tunku Embom）は、ナコンにおもむき、1818年の金銀樹貢納の規定の年にクダースルタンが朝貢を怠ったこと、国内に反乱状態を許していること、クダー（Kedah）の都を南方のメルボ（Merbok）に移し、シアク（Siak）国と共謀していることをスルタンの罪状として訴えた。[Burney Papers、II-IV:182] ナコンシータマラートはただちにスルタンを召喚したが、スルタンは身の危険を感じて応ぜず、さらにシャム首都からの召喚命令にも応じなかった。

訴状による「金銀樹貢納の遅れ」とは1818年に貢納予定の金銀樹が用意できなかったことを指す。クダーはペラ（Perak）戦の疲弊の上に、コレラの流行によって、シャムの規定に従うことができなかった。このコレラはカルカッタから始まった世界的な流行の始めの一波で、主に船舶により東南アジアにひろがった。『ソンクラー年代記』には1820年の５月にコレラが流行したと記載されており、ペナン方面から広まったと言われている［黒田 1986: 112］[1]。

また『ラーマ二世王年代記』の記述によれば1821年マカオの華人商人リム・ホイ（Lim hoi）はタラーン国で不審なビルマ船からクダースルタンにあてた手紙を発見し、これを首都に送った。その内容は、シャムを打破するためにクダーに協力を要請したもので、当時ビルマは西欧勢力や、ヴェトナムにも同様の書状を送っていたといわれる。ラーマ二世はこれを重視し、ナコンの要請をうけてクダー討伐を許しナコン国主ノーイを総司令官に任じた。[Damrong 1963: 141] クダー攻撃に反対の立場をとったソンクラー国主は首都で拘束され鎖につながれ、動きを封じられた。

ナコンは迅速に用意をすすめ、ビルマ戦に備えてトランに常駐させている軍船を率いてクダーの河口（クアラ・クダー）に達した。そして、前年から不穏な動きを見せているビルマを攻撃するための補給食料を要求してクアラ・クダーの砦の門をあけさせてこれを奇襲し、数日にしてクダー全土を制圧した。シャムのナコン軍によるクダーの攻撃とその残虐性、異教徒による占領期はクダーの人々の記憶に長く残り、またペナンの EIC 官吏が報告を受けたことで、詳細な記録があり、クダーマレー人の屈辱の歴史として知られている。

クアラ・クダーの戦闘は1821年11月12日に始まった。この日の正午頃にクアラ・クダーの砦に

[1] マクニールの研究によれば、このコレラ流行はインドで各地に存在していた伝播パターンが、英国支配の上で押しつけられた通商上、軍事上の移動パターンに交差し、いままでそれに晒されていなかった地域まで劇的に広がった。陸地の伝播パターンよりも海路による広がりが劇的で、1820 − 1821 年にはセイロン、オランダ領東インド（インドネシア）から東南アジア大陸部、そして中国と日本に広がった。[マクニール .W.H. 235-236] さらに 1837 年にはコレラの流行が再びおこり、世界的な大流行となった。

シャムの大艦隊が現れた。タイ側の史料によれば、この艦隊はトランとサトゥーンで集めた7000名の軍であった［Damrong 1963: 142］。ナコン軍は「ビルマ討伐のための糧食を要求する」と述べて上陸し交渉を始めた。その間もシャムの兵士は続々と砦の壁を越えて集結した。砦の司令官バプ・クンドル（Bapu Kundor）はすぐに川の側にいたクダーの大臣ブンダハラとラクサマナに連絡をおくるとともにシパーヒーの兵士に24丁の銃の用意をし「裏切りの可能性がある場合に発砲すること」と命令した。そして、Gullick の文学的な表現によれば、突然ナコン軍は「クダー国主（スルタン・アフマッド・タジュッディン II）を拘束にきた」とあかし、ブンダハラとラクサマナは「裏切りだ！攻撃せよ！」と叫んで戦闘が始まった［Gullick 1983］。この戦闘でマレー側では重臣のシャバンダール、トゥメンゴン、ラクサマナが戦死し、ブンダハラ、スルタンの気に入りの息子トンク・ヤコブ（Tunku Yaakob）はシャム軍の捕虜となった。

しかし、ナコンが目標としたクダースルタンの捕獲はならなかった。当時彼は南部のムルボで運河開削事業の監督をしていて、シャムの攻撃と追撃を知ったのは翌日であった。シャムの攻撃はクアラ・クダーだけでなく、クダーの軍事拠点であるランカウィー島にも及び、そこでもクアラ・クダーと同じく、家が焼かれ、人々は殺されるか捕虜になった。クダーの戦力では全く闘いにならなかった。シャム兵士の悪業として、モスクに逃げ込んだ人々に対し豚を放って、ムスリムが「不浄な動物」から逃げ回るのを笑って眺めていた等の行為が伝えられている。ナコン軍は糧食なども奪った。当時米の倉庫があったスブラン・ニョニャ（Sebrang Nyonya）の人々は隣人に「敵が来た」と囁いて噂を広め、クダーの人々は戦に巻きこまれないうちに南へ逃亡した。この敵来襲の噂によって始まったクダーの苦難の時代のことをクダーマレー人は「Musuk Bisik（Whispering Enemy）」と呼ぶ［Ismail Haji Saleh 1977］。クアラ・クダーやランカウィーから逃れた大量の難民は、アチェやペラなどへも逃げたが、もっとも多かったのは英国支配地であるペナン島とその対岸のウェルズレイ地方だった。バーネイ（Burney）は1821年の攻撃により、少なくとも10,000人のクダーマレー人がクダーを去って英国領に避難したと見ている。

ペナンでもシャムが攻撃をしてくるのではないかと騒ぎになっていた。ペナンの人々の恐怖を引き起こし「裕福な住民が彼らの貴重な財産を葬って隠している」という話が語られた［Gullick 1983］。捕まった村人たちは捕虜になり、シャムに「奴隷」としてつれさられた。後に EIC のローガン（Logan）やバーネイはクダーマレーの捕虜達が多数耳に穴をあけてラタンの綱で繋がれてつれさられ、ナコンや首都バンコクに送られて高官や貴族に分配されたのを見ている。このときシャムと闘った戦士として Dato' Wan Panji、Wan Sidik、Tunku Long Puteh、Tunku Mat Riau、Dato'Raja Akil、Dato' Chelang Panjang、Datta Lela Kasa、Dato' Pahlawan Haji Ahmad、そして Dato' Bohor Garang、Tok Moris 等の名前が村々の記憶に残り伝えられている。また、シャムの主力軍は海路から攻めたが、陸路のサイブリー[2]街道からも侵入し、伝によるとコタムンクアン（Kota Mengkuang）のムスリム領主一族を殺したという［黒田 2018］。捕虜はこの陸路をクダーからソンクラーまで歩かされ、大臣ブンダハラはその途中で毒により亡くなったと言われる。

一方スルタンは象にのり臣下とともに必死で逃亡し、５晩５日を費やしてペナンにわたり英国に頼った。彼はたびたび拒否されていたに関わらず、いまだいざというときのペナンの軍力を当てにしていた。だが英国東インド会社は動かなかった。英国とスルタンに対しては、マラッカのオランダから艦隊と軍隊を派遣するという申し出があったが、ペナンはこれも断った。また、ペラ、スランゴール（Selangor）、などのイスラーム侯国が英国にシャムをクダーから掃討してほしいと要求したほか、スルタン自身の身を案じて、アチェ、シアク、トレンガヌからもスルタン

[2] サイブリー（Saiburi）はタイ語におけるクダーの名称である。

を守ろうとする戦士が周りに集まってきた。

スルタンと大量の難民、そしてペナンにとって食料補給の生命線である家畜などもシャム軍によって強奪されたため、ペナンのEICは、早急に対策をとる必要があった。そしてペナンのEICの官吏たちはいったいは誰と交渉するべきなのか、彼らの解釈する近代法の範囲外にある事態の現実に対して論争し悩むことになる。

Ⅴ．ムソビシの時代：ナコンシータマラートのクダー支配とペナンの英国

１．ナコン国主の采配によるクダー支配体制

ナコン国主ノーイはクダーを制圧すると、息子二人を新たな国主とその補佐として置き、ただちにペナンの英国に対して、スルタンの身柄を要求するとともに、クダー統治者に支払われるペナンとウエルズレイ地方の租借代金10,000ドルを英国に要求した。

さらに翌年1822年にナコンシータマラートが中央宮廷から受け取った命令書には、

> サイブリー国はプラヤー・サイブリーが居た頃は安心できる場所ではなかった。王のお仕事を担うべき官吏が首都クルンテープに正直ではなかった。巳の歳、小暦1183年（1821）の報告によれば、ビルマが南部の国々に遠征をしようとしているのでプラヤーサイブリーに米を買わせ、兵と船を準備し戦いに備えさせようとしたが、プラヤーサイブリーはその金印命令書に従わず、メルボの地に逃亡したので公務が失われた。そこでプラヤーナコンシータマラートがこれを不安として軍をひきいてサイブリーの治安を維持しようとした。しかるにプラヤーサイブリーは悪人であり、ペナンから帰ってきて反乱を起こし、人民がプラヤーナコンの軍と闘う事態となった。プラヤーナコンはこれを知り、マレー人共と戦いこれを排撃し、サイブリーを押さえ、公務が速やかに行われるようにした。
>
> プラヤーナコンはこのことによって王のご厚意を得ることになり、位を賜り、さらにサイブリー国とペラ国をナコンシータマラートの属国（Muang Khun）として賜ることになった。プラヤーナコンはナコンシータマラート総督となり、サイブリーとペラを統治した。
>
> サイブリーから得られる物納税の銀はプラクラン（財務省）の倉に入れ、毎年の収穫はすべて年度末にナコンシータマラート国主から首都に送り治めさせよ。」［小暦1184年二月十白分日］」［Krom Simrapaakon、1963. : 83］

と記述されている。

この命令書が意味するところは、

ⅰ）. シャム中央宮廷は、クダーとまだこの時点では朝貢国であったペラをナコンシータマラートの直接統治の及ぶ属国とすることを先に約束していたこと。

ⅱ）. 首都政府の取り分としての物納税スアイ、アーコンが明記され、ナコンシータマラートに総督（Phu Samret Ratchkan）の名を与えていること。

であり、ノーイが首都宮廷において南部を統括する大臣カラーホームや副国王（Wan Na）らに事前に十分に根回しをした結果といえよう。

ナコンがクダーとペラを「属国（Muang Khun）」として得たことは重要である。すなわち、属国とはナコンにおけるトランと同地位であり、クダーは朝貢国の地位を失いナコン国主の統治領に完全に組み込まれたことを意味する。

これは、近代以前の地方統治体系のなかで、つねにその周辺地域に「朝貢国」という緩衝的異民族統治地域をおいていたシャムが、スルタンの統治権を廃して、仏教徒支配者によるイスラーム国家の直接支配に踏み切ったことをも意味し、シャム勢力がペナンという英国領と直接接した

ことで、ペナンにも外交決断を迫ることになった。

その上、仏教徒支配者によるクダー占領は、ムスリムの怒りを刺激し結集を促した。それまで、シャムに対する反乱はパタニの例が多かった。同じくシャムの朝貢国であるパタニにおいては、17世紀にもしばしばシャムに対する反乱＝抵抗が記録されている。ラタナコーシン朝への朝貢を拒否してパタニは1785年に国主の交代をさせられたが、その後も1791年に反シャム反乱を起こしている。このときにパタニを管轄する１級国となったソンクラーが、近しい華人をパタニ内の小地方の領主において、金や錫の採掘を行ってきたことも、地元ムスリムの反感を煽り、パタニで乱は頻繁していた。そして、1808年のヤランにおけるサヤードの乱が鎮圧されて後、パタニは８つの小国に分割統治され、その３つに華人系国主、その他にパタニスルタンの親族ではあるが、互いに好意を抱いているとは限らない人物を配することで、反乱勢力の結集を阻害した。反乱頻発地域を分割統治するという策は、クダーにおいても同じ道をたどる[3]。

さらに、クダーではこれ以前にはパタニに見られるような激しい反シャム争乱の記録は見られなかった。特にこの時のクダースルタン、アフマッド・タジュッディン　ハリム・シャー２世はシャム軍の力を得てクダースルタン位についた経緯があったのでシャムに逆らうことはできなかった。「朝貢国」としてのクダーは、「パタニの反乱鎮圧」のために朝貢国の責務として宗主国シャムからの戦時協力要請に応じる一方で、パタニを援助するために出兵するメッカ帰りのハッジらの義勇軍へは「ムスリムの同朋としてスルタン個人として」援助をしている。強国シャムのパタニ鎮圧への政治的対応と、イスラームの立場からのパタニの援助という、相反する対応を並行して行ってきた。

ナコンはこの時点ではクダーでの反シャムの動きにそれほど注目しているとは言えない。トランやクダーをナコンの属国として子息の統治下においたノーイは、次の射程としてすでに中央宮廷から許可を得ているペラ攻略を予定しておりクダーに二人の息子を送り込んだのはその一人をペラ国主とする予定だったからである。

1825年はペラがシャムに金銀樹を貢納する年であった。ペラは錫の生産が豊富でクダー側では内陸のバリン（Baling）がペラとの通商拠点であった。しかし錫の産地であるペラにはさらに南のスランゴールのブギス出身のスルタンが手を伸ばしており、1825年にシャムへ向かう貢納の隊商はスランゴールに略奪されてしまった。ナコンのノーイは激怒し、トラン港から直接ペラに向かう軍船の準備を始めた。シャムとブギスの衝突という可能性に震撼したペナン EIC が軍船を出航させてナコン艦船隊の出港を阻止し、ナコンの勢力拡大拡大を阻んだ［黒田 2001: 149］。

２．英国東インド会社の立場と「シャム」との交渉 : 1822年、1826年

英国東インド会社（EIC）は、シャムによるクダー占領について、ナコンからのペナンの租借代金の要求を拒否し、マラッカのオランダ軍からの介入の申し入れについても拒絶した。ペナン EIC にとって当面の問題は、ペナンとウェルズレイ地方の安全確認とクダースルタンの処遇についてであった。

クダーが襲われたのはナコン国主ノーイの計略によるという見立てでペナンの EIC 官吏の意見は一致したが、事態打開についてまずは誰と交渉するべきなのか、クダーは果たしてシャムの一部なのか否か、については意見が分かれた。クラウファード（Crawfurd）とバーネイ、ウェルズレイ地方の知事のロウ（Low）はクダーがシャムに属する地方であると判断したが、アンダーソン（Anderson）はクダーの独立性を主張した。

[3] この策は万全というわけではない。ソンクラーはノーンチックに華人国主をおいて鉱山の開発を手がけたが、この非ムスリム国主に対する反乱が繰り返しおこり、結局国主はムスリムにもどされることになった。

ロウの意見は「クダースルタンに本来島の譲渡をきめる権限は無い。英国がこの島を占有しているのは、シャムと直接の交渉をしなかったこと、シャムから直接の抗議が無かったことの上に既成事実化しているだけであり、これは英国による領土の占領という先例をつくる危険な状態である。」というものであった。それに対してアンダーソンは「アンダーソンはクダーとシャムの関係は形式的なものであり、朝貢は従属の印ではない。したがってナコンシータマラートの行為はクダーへの侵略である。英国はクダーを守るためにシャムに干渉するべきである」と言った［Low 1840 、Anderson 1842: 28-30、61-62、90-91、信夫 1968: 402-406］。

この時代英国本国では、国家とは明確な国境を持ち、国家にただ一つの代表政府を有するとの近代国家概念が確立していたが、EIC が対応しなければならなかったインドや東南アジアの伝統的な国家観にはその認識はなく、その後ペラとの境域にあるクリアン（Kerian）の所属についてもどこが国境なのかはクダースルタンにも明確に答えられなかった。英国の「国家」観でシャム宮廷とその地方国統治制度、朝貢国制度を理解することにペナン EIC は苦悩した。

ともかくも交渉への早期対応のため、結局はクラウファードがバンコクのシャム中央宮廷に交渉に向かうことになった。ナコン国主ノーイ（Raja of Ligor）はあくまでシャムの地方知事であるとの判断である。

しかし1822年にバンコクを訪れたクラウファードへの中央宮廷の態度は冷たいものであった。その理由として中央宮廷としてはこの事態はナコンシータマラートとクダーの問題であり中央として交渉することはないという認識があった。さらに、ナコンのノーイからの中央宮廷への根回しが行き渡っており、クダーからの奴隷や米が高官や貴族に分配されその利益を受けているものが多くあり、宮廷は全く交渉にはとりあわない状況であった。

クラウファードの中央宮廷との交渉は不調におわった。シャム中央宮廷からの協力が得られない以上、EIC はナコンとの直接交渉でペナンの保障をえるしかなく、当面のペナンとウェルズレイ地方の地位保全を得ただけであった。英国としては、ビルマとの戦争を控え、シャムを刺激したくないのも本音であった。

しかし、1825年にナコンシータマラートとブギス系セランゴール勢力の衝突がペラで起きそうになった時、英国はシャムとの本格的な交渉と条約締結が必要であると認識した。英国はすべての事件の裏に「リゴールのラジャ」ノーイの存在が大きく、彼は EIC にとっても脅威であるとみていた。「タークシン王の息子」として英国にも知られていたノーイについてロウ は以下のように述べている。

リゴールのラジャは「シャムの最も有能な人物の一人」であった。［Low（1842）in Burney Papers Vol.5.48-49］
彼は忍耐強く、仕事にはしぶとい習慣で接し、しらばっくれる達人であり、また遠回しに空とぼけることによって、こちらの目的を打ち負かすこともできる。….非常に頑強な人物である。彼の会話は簡単で、生気に満ちていて、ひょうきんでもありぶっきらぼうでもあり、包容力ある記憶をもっていた」［Low の1827年７月23日報告 in Burney Papers vol.5:36-37］。

ノーイはよく働く老獪な政治家であり、Gullick はタークシン王の資質は彼に受け継がれたのではないかとまで述べている［Gullick 1983］。クダーのマレー人とペナンの西欧人コミュニティは、この力強くて有能な人物を悪夢と恐れ、EIC のカルカッタ当局は彼を「不慮の脅威」として高く評価していた［Gullick 1983］。

ペナン EIC はまず、このナコン国主ノーイとの間での条約を結ぶ必要があった。この度の交渉にはタイ語にもマレー語にも堪能なヘンリー・バーネイが派遣され、ナコンとの交渉、その後

バンコクでの交渉にあたることになった。

まず、最初にナコンシータマラートとペナン EIC との条約は以下のように締結された。

第１条．ペナンはセランゴールのラジャ・フセインをペラから去らしめ、その国のいかなる住民もその意志に反して連れ出すことを防ぐよう努力する。英国はペラを占領することあるいはその政府に干渉するいかなる希望ももたない。

第２条．リゴールの統治者は陸・海上軍力により、ペラに侵入、またその国に根拠をおかないことを約束する。

第３条．リゴールのラジャ（ノーイ）とバーネイはマレー・シャム・英国領内の住民の自由貿易を保証する。

第４条．英国はセランゴールに対し、セランゴールが奪ったペラの財産2000ドル相当を変換するように交渉する。

第５条．シャムはセランゴールに侵入しない。

第６条．英国国家はクダーに干渉しない。

第７条．リゴールのラジャは先の条項についてシャム王に報告し、もし王が同意したならば、兵をひいてクダーの王に故国に帰れるよう、そしてシャムの軍隊はクダーに入らないようにする。

第８条．ナコンシータマラートとバーネイは当海域における海賊行為の公平な取り締まりに関して有効な基準をもうける。

第９条．ナコンシータマラートとバーネイはシャム人と英国の間の相互理解を進める

第10条．バーネイは代表にこの条項を見せる前に複製を作って三ヶ月以内にナコンシータマラートにも送る。

第11条．ナコンシータマラートはバーネイと条約がナコンシータマラートに到着したら、できるだけはやく批准する。

第12条．ナコンシータマラートは20日以内に軍隊を引き上げること。

第13条．この条約は小暦1187年８月第７日に制作された。（1825年７月31日）

［Burney Papers v.1-4: 703-705］

ナコンとの個別交渉でなんとかナコンの拡大を抑えることができた EIC であったが、バンコクではことはスムーズにはこばなかった。

バーネイの報告では「バンコクではクダースルタンの味方を一人もみつけることができなかった」［Burney Papers 1-1: 216］だけではなく、スルタンが戻ってくることを許すだけで、シャム人が数多くのクダーマレー人難民をクダーに帰還させることができるとバーネイが主張したところ、リゴールのラジャ（ノーイ）から「もしバーネイがスルタンの復位を強く求め続ければ、残りの彼の交渉もあやうくなる」と脅迫を受けた。

バーネイはシャム中央宮廷でのいらいらするような長い交渉時間を費やしたあげく、たいした成果を上げることはできなかった。ともかくも1826年６月20日に条約は締結された。これが「バーネイ条約」と呼ばれる。だがその評価は芳しくなく、英国がシャムに強硬に要求を通すことができず、当時のクダースルタンの復位についてもシャムが関心を示さなかったため、ペナン EIC に戻っても失敗であったと非難された。

もともとペナン EIC では元スルタンの処遇について同情的であった。この元スルタンに対してはペナンの人々、西洋人、華人の交易商人たちだけではなく、ペナンの EIC 官吏自身も1823年４月28日にトゥンク・アブドゥラ（Tunku Abdullah: 元スルタンの息子）が率いるクダーの失地回復の動きに関するナコン国主ノーイの抗議に対し、ペナンの知事フィリップスは「シャムがクダーに対しておこなったことを振り返れば、シャムが国家統治者を亡命者にし、その臣下や相続人を捕まえたのである。そのような残酷なやり方でシャムがクダーの元支配者の残党を見張り

つつ、クダーの人々がシャムへの復讐を企んだとしても、英国は英国領に居住しない人々に付いての何らかの措置はとらない。」とのべて、シャム治下のクダーについては不干渉を表明した。

しかし、EIC の態度は、バーネイ条約が1826年に英国とシャムの間で締結されたことで変わった。それはバーネイ条約の第13条に起因するものである。すなわち第13条では

シャムは以下のことについては英国に従う。シャム人はクダーに留まり、その国とその国民の適切な取り扱いにあたる。ウェールズレイ地方（Seberang Prai）とクダーの住民はこれまでと同様に貿易と交流を持つことになる。シャムはウェールズレイ地方の住民またはそこにある牛、水牛、家禽、魚、水田、米などの物資や食料品を、クダーで購入する機会の義務を課さない。シャム人は、クダーの河川や河口で耕作してはならず、公正かつ適切な輸出入義務を課すものとする。シャムはさらにリゴールのチャオ・プラヤ（ナコン国主ノーイのこと）がバンコクから戻ると、前のクダー知事（元スルタン）に所属する奴隷、個人的な召使、家族、親族を解放し、彼らが何とか生きてとどまることを許す。

英国は以下のことについてはシャムに従う。即ち英国はクダーの所有権を望んでいない。そして、英国はクダーを攻撃したり、邪魔をしたりしない。英国はクダー元知事または彼の信者たちがクダーをクダーのテリトリー、またはシャムの対象となる他のテリトリーであってもいかなる方法にせよ、攻撃したり邪魔したりすることを許さない。英国は、元クダー州ウェールズレイ知事（元スルタンのこと）がウェールズレイ地方やプライ、ペラ、セランゴール、またはビルマの国ではなく、他の国に移住することを約束する。もし英国が旧クダー知事を他の国に移住させ、そこにとどまっているようにすることができなければ、シャム人はクダーの水田と米に輸出義務を引き続き課すであろう。英国はそれを望むなら、ペナン島、ウェールズレイ地方のシャム、中国、または他のアジア人がクダーに住むことを妨げない」[Burney Treaty Article XIII]

この13条で問題となったのは「ペナンが元スルタンをクダー以外の地に移さないかぎり、クダーにとって生命線である食料の提供にシャムは課税制裁を加える」と解釈される面である。

また、同じく元クダースルタンを含む反シャム勢力がクダーへの侵入や攻撃を許さないという条項は、この後に起こる反シャム運動をペナンが初期の段階に把握できなかったことで、ペナン自身がシャム側を支持し「反シャム武装蜂起」を鎮圧する側にまわらざるを得ない根拠となった。

まずはシャムとの取り決めによって、ペナン EIC は元スルタンを他の地に移送せざるを得なかったが、スルタンは移動を拒否し続けていた。1826年には元スルタンは60才になっており、また大家族や使用人を抱え、元スルタンとしての生活のレベルを落とそうとしなかった。彼は英国の結んだ条約に失望し、頑なになる一方だった。ペナン EIC はスルタンがペナンに居住している間は条約に反するとしてクダーの租借年金10,000ドルの支払いを停めていた。会社は元スルタンがマラッカに移るならば年金を支払うと約束したが、元スルタンは人々に不信感をいだいて、一時期鬱状態になり、ほとんど家からでることをしなくなった。ペナン EIC が彼をなんとか説得したようとしている間に、秘密裏に反シャム勢力によるクダー奪還計画が建てられていた。

Ⅵ. トゥンク・クディンの蜂起－1831年

トゥンク・クディン（Tunku Kudin）こと Syed Zainal Abidin は元クダースルタンのいとこで、パレンバンからきたアラブ商人の息子でもある。アロースターに居住していたが、1821年のシャムの侵入により、家族とともに逃れて英国領ウェルズレイ地方に避難していた。彼には人望があり、シャム人から監視されていたといわれる。あるとき午前三時に家に侵入してきたシャム人（と伝わる）が家を焼き、トゥンク・クディンは妻も子供も財産も失った。ウェルズレイ地方の

マレー人たちはトゥンク・クディンの周りに集まり、リゴール（ナコン）からのクダーの解放を訴えた。

反シャムへの動きは1828年には元スルタンの弟であるトゥンク・ロン・プティ（Tunku Long Putih）がウェルズレイ地方に侵入し、1829年２月23日に英国は、クダーの旧スルタン側の人間がシャム治下のクダーを攻撃するいかなる運動も禁止する宣言を出してはいた。しかし、同年、トゥンク・クディンは再びTunku Jaafar、Tunku Dagang（Tunku Long Putihの息子）、Panglima Marwar、Che Man、Panglima Itam、Imam Semahun、Che Haji、Panglima Hossain、Panglima Mim Che Bliio、Awang Lahal、Che Akilのような有力なマレーリーダーの助けを借りてクダーを攻撃した［Burney Papers、vol.5-1、1913: 139］。だがシャムに対してはまだ無力であった。

トゥンク・クディンによるさらなる攻撃は1831年におこり、Tunku Long Putih、5000人余りが集まり、旗を立てた大小の船がクアラ・クダーに集結した。参加したものはKuala Muda、Kuala Merbok、Kuala Yan、Kuala Sala、Kuala Tebengau、そしてランカウィー島からも集まり、トゥンク・クディンの軍はクアラ・クダーを急襲して1831年４月24日にこれを占拠した。

そのときクダー国主となっていたのはプラヤー・ブリ・ラクプトン（Phaya Buri Rakputon）の欽賜名を持つ、ナコンのノーイの息子のセーン（Sen）である。副官はその弟のプラ・シナ・ヌチット（Phra Sina Nucit）でクダーではチョム・パビアン（Com Pabian）の名で知られていた。

プトンをクアラ・クダーから追い出し、チョム・パビアンがいるアロー・ガヌ（Alor Ganu）にせまった。アロー・ガヌはシャム軍の拠点になっていた。

トゥンク・クディンのクアラ・クダー占拠の成功の報はペナンEICを驚かせた。クダーの難民コミュニティの動きを英国はそれほど評価していなかったからである。しかも、トゥンク・クディンの蜂起とクアラ・クダーの占拠には、ペナンからも数百人のマレー人が同行して、食料や武器の供給もペナンから西欧人コミュニティを含む支援があった。

英国は条約にしたがって、アロー・ガヌのシャム軍に武器と弾薬を送り、まず"Zephyr"と"Emerald"の二艘の軍艦を送り、その後"Wolfe"と"Crecodile"の軍艦を送った。"Wolfe"はマラッカ海峡の海賊掃討に使われている船であった。シャム軍は劣勢だったが、この英国船が加わることでマレー人の海軍を打ち破った。

クアラ・クダーを占拠したトゥンク・クディンの軍は籠城を強いられた。クアラ・プライ（Kuala Perai）のトゥンク・スライマン（Tunku Sulaiman）は支援のため3000人を送ったが途中で捕獲されてしまった。クアラ・クダーでは食料と薬が不足し、病人が多数でて、死者を埋葬する日々が続いたという。戦いから脱落して逃亡するものが多数でるなか、トゥンク・クディンは30名の兵士とまだとどまっていたが、1831年10月4日、クアラ・クダーにナコン軍が到着した。7,000人の兵士と300の象部隊の攻撃により、トゥンク・クディン自身が胸部と大腿部に重傷を負った。トゥンク・クディンは副官と互いに差し違えて自殺したと言われている。それでも彼らはクアラ・クダーを半年近く占拠したのである。トゥンク・クディンの頭部はリゴールまで持って行かれて国主ノーイがそれを見たといわれる。［Ismail Haji Saleh 1977: siri 2］。この戦いによって4,000から5,000の家族がシャムの捕虜になったともいわれる。

しかし、一時的ではあったがトゥンク・クディンの勝利によって、マレー人たちの間でシャムからクダーを取り戻す機運が高まり、彼らは決して自らの手でクダーをシャムから解放することを諦めなかった。

Ⅶ. モハマッド・サードとワン・マット・アリの戦い：1838-39年

1．元スルタンの処遇：ブルアス事件

トゥンク・クディンの戦いについてペナン EIC は元スルタンがこの戦いに関与していたとは見なかったが、トゥンク・クディンの兵士はペナンの既製服店で入手した古いシパーヒーの制服を身につけていたことなどからペナンにトゥンク・クディンの支援者がいることは確実であった。シャムからの抗議を受け、今後も問題の焦点になると思われる元スルタンをただちに条約にしたがって移動させることにした。

元スルタンはペナン総督やそのほか大勢に支援と窮状を訴える手紙を書いた。彼はビルマにも期待していたが、1824年に英国がビルマと戦ってこれを打ち破ると、ビルマがクダーを支援する望みもなくなり、またシャムはビルマの脅威から解放された。英国は1831年に元スルタンをマラッカに移送し、スルタンがほぼ納得する体裁の宮殿を用意した［B.C. 1620/64996、Gullick 1983: 42］。当時マラッカに駐留していたニューボールド（Newbold）は、元スルタンはマラッカでは拘束から解放されているが、マラッカからでることはできない、と述べている［Newbold Vol.II 1839: 17］。元スルタンはその年一旦ペナンにもどって彼の親族を援助しともにマラッカで住みたいと懇願したが、それは認められなかった。その後、元スルタンはスマトラ東海岸のデリ（Deli）で暮らすために家族とともに行きたいと要求した。英国は条約の13条で禁止されている地域以外であると判断したのであろう。それで、途中とどまること無く、直接デリにいくことを条件にそれを許可した。ところが、元スルタンは同行を拒否した EIC 官吏の隙を突いてペラの海岸のブルアス（Buras）に到着し居着いてしまった。ブルアスは英国領ではなかったが、ペラの皇太子（ラジャムダ）の40～50艘のマレー軍船と1400人の兵士が「海賊行為」を行っており、ペナン EIC は軍船を二艘派遣してそれ以上の事態が起こるのを防いだ。

ブルアスでの元スルタンは自分にはクダーの支配者としての権限があるとしてランカウィー島の燕巣税の徴収を指示し、さらに、1837年３月27日には臣下たちにランカウィー島で集結するように呼びかけた。ペナンのボンハム（Bonham）知事は元スルタンに条約に基づいた警告をし、ブルアスからシンガポールに移るように説得したが、元スルタンはそれを拒否した。この時点で元スルタンはシャムに対抗する勢力が準備を整えているのを承知していたのであろう。彼を移送するためにボンハム知事から指令をうけていた英国の海軍のマックリー（McCrea）は、ブルアスの河口に到着して、元スルタンに武力行使によって彼を退去させマレー海軍を攻撃すると説得したが、頑固な元スルタンは納得せず、Gullick によれば、「あなたに武力を使うというこの痛い義務を私にさせないでくれ」とのマクレアの嘆願に対して、元スルタンは「私は、クダーに行く。さらに、そのような方法で移動させられるのは王の尊厳に反する」と述べた。しかし、翌日まで元スルタンは回答を保留した。

ブルアスの河口は浅く両側がマングローブで覆われていたので、マックリーの軍船は侵入することができなかった。翌日マックリーは返答を受け取りに小艦隊を編成して、マングローブ林に取り囲まれた曲がりくねった水路を行くと、元スルタンはマックリーの提案を拒絶しマレー軍からの発砲によって戦闘が起こった。この戦いはマックリーの軍にとって不利な地理条件であったにも関わらず、元スルタンを降参させることに成功した。

元スルタンはマラッカにつれもどされ、非常に打ちひしがれた状態であった。EIC は側近に賄賂をはらって身の回りを監視させた。元スルタンはブルアスへの突入計画のためにマラッカの商人から多額の借金をしており、ボンハム知事は元スルタンを債権者から解放するために、クダーの年金の10,000ドルを支払うことをカルカッタのインド政庁に提案したが、カルカッタはその借金は不適切な目的のために生じた負債であるとして「無責任な提案」として拒否した［B.C. 1837/76388: l-10、Gullick 1983: 96］。それでも、マラッカ海峡のマレー諸国では、元スルタンを

援助し、反シャム連合をつくる可能性のある力をもつ人物はいた。たとえば、クアラ・ランガート（Kuala Langat ）の海岸を遡った地区の首長で、英国人が「悪名高い悪人」とみなしたラジャ・アブドゥル・サマド（Raja Abdul Samad）である。この時期アブドゥル・サマドは若い海賊首領で「自分の手で99人の男性を殺した」と語っており、クダーへの攻撃のためにマレー艦隊を動員する計画があれば、アブドゥル・サマドは非常に適切な同盟相手であり、英国の警戒対象であった。

２．トンク・モハマッド・サードとワン・マット・アリの蜂起－1838-1839

しかし、クダーをシャムから奪還しようとする戦いでもっとも大きく広範囲に影響を与えたのは1838年に起こったトンク・モハマッド・サード（Tunku Muhammad Saad）とワン・マット・アリ（Wan Mat Ali、または Wan Mali）の蜂起であった。

トンク・モハマッド・サードは元スルタンの甥であり、ナコンで囚人になっていた経験があった。彼らのこのたびの計画は、非常に慎重に計画され、老境にある元スルタンではなくその長男のトンク・アブドゥラ（Tunku Abdullah）を旗印とした。また、ランカウィー島で1821年に戦死したダト・カルマジャヤ（Dato Karma Jaya）の息子のダト・ムハマッド・アリ（Doto Muhammad Ali）がアチェに行き、大型船を含む海軍を編成した。

1838年の３月24日にトンク・モハマッド・サードはクダーを占領しているシャムとの戦いを呼びかけ、ムルボ川に集まるように賛同する者を招待した。これによって、ランカウイのダト・ムハンマド・アリのほか、サトゥーン出身のトンク・ムハマド・タイブ（Tungku Muhammad Taib）、トンク・ムハンマド・アキブ（Tungku Muhammad Akip）、サイード・フシン（Syed Husin）とプルリスからはワン・ムハンマド・アルシャッド（Wan Muhammad Arshad）、トンク・スライマン（Tunku Sulaiman）そして、クダーの有名なイスラーム学者であるシェイク・アブドゥル・サマッド・アルーパレンバン（Syeikh Abdul Samad al-Palembang）が参加を表明した。ダト・パングリマ・ブキット・ガンタン（Dato 'Panglima Bukit Gantang）は、兵士100人と５艘の船をクダーに送った。

また、この戦いではクダー内陸の農村部からも参戦者があり、しばしば、村の英雄として子孫がそれを伝えている。よく知られているのはクボール・パンジャン（Kubur Panjang）の近くのプルポック村（Kg.Perupok）のト・モーリス（Tok Mo Ris または Bomoh Idris）やプライのダト・シャバンダール・ワン・ダウド（Dato 'Syahbandar Wan Daud）、内陸の錫交易地のバリンの人々、バンダールバル（Bandar Baru）から参加したダト・マディ（Dato’ Madi）などである。ト・モーリスはパタニからクダーに来た呪術と武術（シラット）の達人として知られており、この戦いにはパタニやスマトラから、またブギスなどが個人単位の義勇軍で加わった。

英国は４月には直ちに軍船 Hyacinth を送ってクダーの反乱軍を鎮圧にあたったが、戦いは内陸に展開して行った。すなわち５月にはトンク・ムハマド・タイブがウェルズレイ地方に約700人を侵入させ、６月13日にトンク・モハマッド・サードはムルボ川でシャム軍を敗走させてクダーに入り、戦いはクダーとプルリスへ展開した。８月３日にはクアラ・クダーとプルリスのクアラ・クアがトンク・モハマッド・サードによって占拠され、捕らえたシャム人を拷問して殺害し、アロー・ガヌに拠点を置いていたプラヤー・ブリ・ラクプトン（ノーイの息子のセーン）のシャム軍を破った。また、ダト・ムハンマド・アリが北に移動し、サトゥーンの奪還に成功した。その後、シャム軍はクダーから追い出された。

トンク・モハマッド・サード軍のワン・ウア（Wan Ua）とワン・マット・プラウ（Wan Mat Pulau）の軍隊はクダーの国境を越えて、パタニ領内のチェナック（Chenak）に進軍した。華人とシャム人はソンクラーに逃げた。この遠征でトンク・モハマッド・サード軍は村と仏教寺院を

破壊した。トンク・ムハマド・タイブとトンク・ムハンマド・ジワ（Tunku Muhammad Jiwa）の軍隊は約2,500人がソンクラー領内に移動し小規模な要塞を11つ設立した。最終的にはトンク・モハマッド・サード軍はハジャイを占領した。500人の華人と2,000人のシャム兵が追放された。

一方、シャム側では、トンク・モハマッド・サードの進軍が始まった時には、ナコン国主のノーイもソンクラー国主のティエンセンも中央宮廷での王妃の葬儀に参列するため首都に出かけていたのでそれぞれの領地に不在で、トンク・モハマッド・サード軍にその隙を突かれた形になった。ハジャイの占領を聞いてナコン国主のノーイもソンクラー国主ティエンセンも急ぎ領地まで戻り、ノーイは1,500人の兵士を抱えてクダーに入り、英国軍の助けを借りてマレー人の反政府勢力に対応を始めた。

クダーマレー軍がクダーの北部、サイブリー街道沿いにクバンパス（Kubang pasu）からサダオ（Sadao）に入り[4]、そこに駐留してソンクラーを攻略したことはバンコクのラーマ３世の宮廷をも震撼させた。南部のマレー諸国の防衛はナコンシータマラートとソンクラーの責務であるとはいえ、マレー軍がソンクラーに迫ったことはなく、また、西海岸の海路からはワン・マット・マリ（Wan Mat Ali）の率いる海軍がサトゥーン、ラグー（La-ngu）などを攻撃し、ランカウィーを起点としてタラーン港市群の周りのコ・ヤオ（Ko Yao）島の海域に至った。

ソンクラーからパタニに至る海岸線にあるチャナ（Cana）がマレー軍に襲撃され、ソンクラーでは急ぎもどったソンクラーの華人国主ティエンセンは、パニックになるソンクラー市民を背景にマレー軍と和解を図ろうとしていた。しかし、戦略的能力が未熟で、武器の有効な使い方をしなかったため、マレー軍の侵入をハジャイまで許したということで、この報告をバンコクできいたラーマ３世は、激情に駆られて「この馬鹿者」とソンクラー国主を何度もののしっている。タイ語史料のルアンウドムソムバット書簡の第３書簡1838年２月24日にはラーマ３世は

> 今日、南部の国々はお金を稼ぐこと以外には何も考えていないようだ。彼らは自分の利益を増やし、豊かにするだけだ。このようなことが起こった場合、戦争のやり方は忘れられた技術になるだろう。世代が進むにつれて、戦争の方法を知っている人は誰もいなくなる。戦争が起こった時、私たちは戦争経験を持つ人たちを無駄に探さねばならない。銃器の使い方を知っている人はいない。

と側近に語っている［Udomsombat 第３書簡］

ラーマ３世をいらだたせたのは、ナコン国主とソンクラー国主が急ぎ領地にもどる一方、先に戦争のための糧食が足りないことが現地から報告があり、なんとか各地からかき集めた米を南部に送ろうとしたが、モンスーンの風の都合や王室行事のために、船を３月７日までに出発させなければならず時間が迫っていること、さらに糧食船を民間からも借り出して43隻を送ろうとしたものの、老朽船が破損するなどのトラブルに見舞われたうえ、その所在が長らく不明であり一向に報告が上がってこなかったからである。

中央宮廷は、ナコンシータマラート軍3,000人、ソンクラー軍1,000人の他、各地からカンボジア兵をも乗せた援軍を駆り出して総勢10,000人の体制でクダーの乱の鎮圧にかかることにし、1839年２月から順次南部に送り出したが、ラーマ３世王は、陸路でソンクラーに向かおうとした

[4] サダオは現在のタイとマレーシアの国境の町である。タイ側をサダオといい、マレーシア側をブキット・カユ・ヒタム（Bukit Kayu Hitam）という。サイブリー街道上の要衝であり、現在は片側２車線の 40m 巾をもつマレー半島縦貫高速道路として使われている。国境を越えてハジャイ、ソンクラーに至るため、陸路国境としてはマレーシアではシンガポールへの橋国境に次いで交通量が多い。このサダオ＝ブキット・カユ・ヒタムから南へチャンロン（Chang Lon）、クバンパスをへてジトラ（Jitra）からアロースターにいたるが、チャンロン（Chang Lon）、クバンパスとジトラ近郊には「シャム語」を日常語とするマレームスリム村落が多い。シャムとクダーの長い歴史交流によるものである。

象部隊に対しても疑念を抱き、時間がかかる上、兵の疲労が多く、ナコンにもソンクラーにも象の数は少ないとしてソンクラーの戦術に怒りを爆発させていた。

ナコンとソンクラーからあまりにも長期間報告が届かないので、宮廷は華人の交易船をとらえて情報を聞き出すしかなかったが、その華人交易船はしばしばアヘン密売船でもあったため、アヘン売買吸引の禁止、撲滅を強く訴えているラーマ３世はますます激怒した。

中央宮廷に断片的な情報しか届かない中、やっとナコンシータマラートからの使者が到着したが、その報告には民間華人船の情報と比べて嘘が混じっており、ナコン国主ノーイがソンクラーの窮状に援助をせず、また半ば意図的に報告をしていないこともわかってきた。ラーマ３世はマレー人との戦闘経験のあるペッチャブリー国主にアドバイスをもとめ、さらに華人のアヘン交易にソンクラー国主が関わっているのではないかという疑いも持った。

一方、トンク・ムハマッド・サードの軍隊は、ナコン軍が到着した1838年８月以降、ナコンシータマラート軍とクダーのシャム軍が、ソンクラーの状況を無視して、ハジャイからサダオ、そしてクダー領のクバンパスへ進軍したため形成が逆転した。ハジャイでは20日間の戦闘の結果、トンク・ムハマッド・サードは捕獲され、シェイク・アブドゥル・サマッド・アル-パレンバンは戦闘で殺された。さらに、サトゥーンはまたシャム人が占領していた。この地域に住んでいるマレー住民の中には、クダームスリム軍がやってきて、いやいや参加していたものもあり、期を見て逃亡するものもあり、トンク・ムハマッド・サードの軍で残ったのは500名となった。トンク・ムハマッド・サードはバーネイ条約の第13条により「海賊」として処され、インド政庁に送られたが、後にペナンで亡くなった。また、ワン・マット・アリはメルギー（Mergi）方面へ逃走して、クダーを取り戻そうとする試みは挫折した。

３．ナコンシータマラート国主ノーイの死とクダーのその後の処分

ナコンシータマラート国主ノーイの行動は、当時の地方統治体制の中では、かならずしも中央宮廷の指示を仰ぐことが必要ではなかったため、意図的に状況を隠している面もあった。それはソンクラーも同様である。そのため、中央宮廷では情報を把握するのに苦労した。交易商人から得た情報とナコンシータマラートからの使者の報告が矛盾することもしばしばであった。

しかし、ナコンシータマラートによるクダー支配の結果マレー諸国をシャム人が治めるのは無理ではないかという意見が1839年３月には宮廷で検討され、マレー人で能力のあるものならばその人物に任せようという意見に王も同意していた［Udomsombat 第一書簡 1838年３月1日］。

そんなとき、1839年５月６日にナコンシータマラート国主ノーイはにわかに病気となり、５月12日に亡くなった。彼の死についてはマレー側では毒死、あるいは事態を恥じて毒による自殺説があるが、ルアンウドムソムバット書簡によれば、嘔吐につづく肺炎と喘息様の呼吸困難で、体が冷たく麻痺して亡くなったと記録がある。毒の関与は不明である［Udomsombat 第13書簡　６月14日記述］。

彼の死はノーイの南部地域におけるいままでの彼の専横を取り除く好機ではあった。むしろ、ノーイの死によって英領に避難しているクダーマレー人の帰還が容易になるのではという期待もあった。

ペナンのボンハム知事はノーイに哀悼の意をしめしながら、ノーイの失策が死のストレスとなったとかんがえ、彼がシャム宮廷では嫌われていたと考えたが［Gullick 1983:48、quoted B.G 1807/74268 p.183. ］、ラーマ３世は、ノーイの政治力を買っており、むしろ、アヘン交易密売の疑惑があり、戦略的能力に劣っていたソンクラーの華人国主のほうを低く評価して、ソンクラーでのアヘン価格やアヘンの蓄えがないか調査させた［Udom Sombat 第一書簡 1839年１月30日］。

その後、中央宮廷の閣議ではノーイの死による、いくつかの問題が持ち上がった。一つはナコ

ンシータマラート国主の後継ぎ問題である。ノーイは1826年にパタルンの老国主を強引に引退させてかわいがっている長男をパタルン国主に据えていたが、彼はアヘン中毒になっていたため、結局ナコンシータマラート国主候補からはずされることになった。さらに、1839年４月からのクランタンのスルタン位を巡る争いについて、ラジャ・クランタンとその反対者トゥンク・ブサール（Tengu Besar）がともにナコンシータマラートの裁定を当てにして争っていたことにも決着をつけねばならなかった。この事件がノーイの死のストレスになったともいわれる。三つ目の問題はクダーの再建にあたっての国主の人選問題である。過去に乱が頻発していることからナコンシータマラートにもソンクラーにも任せることはできないと結論された。

ペナンに監視されている元スルタン、アフマッド・タジュッディン２世は老境にあり、英国はバーネイ条約の規定により、スルタンの復帰にはまだ懐疑的であった。そしてこのときに動いたのは、クダー王家に連なるより穏健な人物である。

トンク・ダイ（Tunku Dai）は1837年のブルアスの事件の失敗に至るまでは、反シャムの武装闘争に積極的に参加していた。トンク・ダイはマラッカを離れたい元スルタンの代理交渉者として英国会社と渡り合い、スルタンの信頼を得ていた。ペナンのボンハム知事は彼がシャムとの交渉に当たる前に私費で彼の服装を整えるなどまでした。ただし、ボンハムはシャムに英国の関与を疑わせる行為は厳禁であると決めた。トンク・ダイはいとこのトンク・モハマッド・アキル（Tunku Mohamed Akil）を伴って1841年なかばにバンコクに行き、シャム宮廷のラーマ３世の元での形式的で半ば屈辱的でもあるへりくだった姿勢のままクダースルタン家の復活を訴え、朝貢のための金銀樹の貢納を申し出た。

しかしより現実的にシャムの意向に沿ったのはトゥンク・アヌム（Tunku Anum）であった。トゥンク・アヌムはムソビシが始まったときにはリゴール（ナコンシータマラート）にいたと言われるように、元スルタン・アフマッド・タジュッディン・ハリム・シャー２世からは距離を置いていた。シャムはクダーを交易のためにも引きつけておきたかったので、かつて反抗的なパタニを７つの小国に分割統治したようにクダーを４つに分けてそれぞれに統治者をおくトゥンク・アヌムらの案に傾いた。

トンク・ダイがバンコクに行ってみると、すでにクダーの分割の相談は始まっており、クダーがナコンシータマラートに接する北辺のラグーからサトゥーンをナコン王と親しかったトンク・ビスヌが、プルリス（Perlis）をサイード・フシン（Syed Husin）が、クバンパスをトゥンク・アヌムが統治することになり、小さくなったクダーに元クダースルタンが復帰を許された。

スルタン・アフマッド・タジュッディン・ハリム・シャー２世はこのようにして1842年から1845年までスルタンとしてクダーに復帰した。その後縁戚ではあるもののプルリスは別の統治単位に、サトゥーンはシャムの県として残った。クバンパスのみがトゥンク・アヌムとその息子の統治のあとクダーに復帰した。

Ⅷ. ムソビシの時代についての様々な考察

さて、上記のように、シャムとクダーを巡るマレー半島中部の交易網に関わる問題、さらにそれを巡る政治力学を、残されている文字資料のみで述べてみると、ともに港市であるクダーについてもシャム、あるいはナコンシータマラートについても、表舞台に残るのは、政治と外交の記録だけである。ところが、ムソビシの時代が現代のクダーにおいても人々の関心を惹くのは、クダーのマレー農村に伝わる口承と記憶の継承による「文字になっていない歴史」の存在が知られているからである。

ここでは、「ムソビシの時代」とクダーの人々が呼ぶものを少し異なった視点から眺めてみたい。

１．秘匿されたシャムへの恐怖

クダーへのシャム、すなわちナコンの侵入と占領は、ペナンの交易に引きつけられたもので、ナコン国主ノーイのペナンルート、ペラへの錫獲得ルートを独占しようとしたことから起こったものであることは明白である。しかし、この結果としてノーイの息子であるシャム人仏教徒国主がクダーにおかれることになった。それはクアラ・クダーでの血まみれの記憶やシャム人の残虐さとして、シャムが1939年に日本の東南アジア侵攻への協力の見返りにすでに英領マラヤに組み込まれていたクダー、クランタン、トレンガヌをタイ国に与えたことにまで関わるシャム人支配のイメージである。つまり、クダーの農村部において未だに記憶されているのは日本軍が侵入して急いでシンガポールに南下していったあとから、農村に入りこみ、食糧や女性への暴行をともなう「強盗」としてのタイ人の姿である。クダーでは日常語として「シャム語」（言語学的にはTai 語の南タイ方言に類似している）を話すグループが20世紀半ばまで多く存在し、シャム語で会話する集落がクダーのあちこちにあった。その一つの地域が、トゥンク・アヌムが統治したクバンパスである。しかし、同時にタイ人に対する恐怖は、日本軍占領期のタイ人の行状だけではなく、ムソビシの時代の村の事件、たとえばト・モーリスが多勢のシャム人を殺害したプルポック村でタイ人兵士の多数遺骸を埋めた穴の存在があり、それは村外に漏らしてはならない秘密として守られてきた事などに現れている。

特に、クダーマレー人の主要な活動地域である沿岸や海域の低湿地ではなく、内陸の村ではシャム人（Malaysian Siamese）の仏教徒や、時にSamsamと呼ばれたことのあるThai-speakingムスリムの村落に伝わる伝承は、近年までほぼ外に語られることが無かった。タイ人の復讐をおそれて秘密にされてきたという［Yacob 1983］。

２．ジハード戦としての反シャム行動

ムソビシの戦いにはクダーだけではなくアチェ、パタニ、など他地域からのムスリム義勇軍ともいうべき人々の参加があったことが知られている。特に、パタニは1808年に７つの国に分割統治され、同じ王家であるにも関わらず、クランタンをシャムが別の朝貢国として扱う経験を経たため、シャム占領下のクダーの行方も同じになるのではないかと、危惧するパタニムスリムが元クダースルタンのもと、あるいは反シャム抵抗運動へ参加している。

また、トンク・モハマッド・サードの乱では、イスラーム学者の参加があり、「ジハード（聖戦）を叫んだ」と表現される地元の語りがある。クダーやパタニには、宗教学校（ポンドック、あるはポノ）とイスラーム学者の所在で著名であり、「メッカのベランダ」とも呼ばれてきた。特に1803年にワハビ派がメッカを支配したときから世界中のムスリムがコーランとハディースに基づく道徳と宗教的価値を重視するようになり、それはアラブ商人や宗教学校で最新のイスラーム学を教える学者、教師によって広がった。クダーが異教徒であるシャムに征服されたことは人々の団結を呼びかけるうえでの戦闘的な宗教運動としての「ジハード」という言葉が使われた。クダーの王族のためではなくムスリムとしての戦いという位置づけも可能である。

３.海賊、盗賊と乱への参加者

その一方で、ウェルズレイ地方の知事であったロウは「シャム人に襲われた」とされる強盗事件の中には、マレーの海賊や盗賊によるものがあったのではないかと見ていた。クダーとペラの沿岸地域クリアン（Kerian）は帰属がはっきりしない土地だったが、英国はナコンのペラへの野心をバーネイ条約の後でも警戒し続けていた。その中で1827年にクリアンのさらに南のクラウ（Kurau）でロウが捕獲したのはナコダ・ウディン（Nakhoda Udin）という海賊であった。彼はナコン国主の指示を受けて、ナコン国主のノーイからクラウの領主であると任命した手紙を所持

していた。Low によればノーイはこの秘密計画を暴かれて困惑していたという［Gullick 1983: 56］。このため EIC は1831年にトランヘナコン国主ノーイを訪ねてクリアンをペラ領と見なすことで合意に達した。また、様々な地域から傭兵として雇われたムスリムの中には、シャム側について闘った者も存在していた。セレベス出身のパングリマ・ユ（Panglima Yu）がシャム軍を率いて、ワン・マリと闘った話や、シャム人によって扇動された地元のムスリム、パングリマ・ナリム（Panglima Narim）などの逸話も伝わっている。

４．非ムスリムの行動 : 交易商人と秘密結社

トンク・モハマッド・サードの攻撃計画が秘密裏に進められたように、ムスリム以外の協力者がシャムとクダー、あるいはペナンの双方に存在した。武器や弾薬などを提供したのは、交易商人である。初期の大伯公（Tok Peh Kong）の秘密結社の総長であると信じられているクアラムダの華人のババ・セン（Baba Seng）はマレー人の戦闘支援に積極的だった。ババ・センは、クダーのスルタンからコタ・クアラ・ムダの港を借りているペナンの華人商人の指導者によって任命されたコタ・クアラ・ムダの徴税人であった。1825年５月、ババ・センはシャム人のクダー国主（ナコンのノーイの息子）によってペナンから10コヤンの塩と銃をクダーに買ってくることを委託された。しかし、その後、ババ・センはその任務を遂行せず、隠していた。その後、彼は盗まれた物品を受け取った犯罪者のためにクダーに送り、クアラ・ムダの海賊を守った［Musa 2003: 33］。

ババ・セン（Baba Seng）は、クダーマレー軍と戦う武器を提供する際にナコン政府と協力することを拒んだため、依頼主のシャム人クダー領主の要求を満していなかった。時には盗品がでまわることもあり、その銃はクダーのシャム人政府を不定期に攻撃しているマレー人に使われる可能性もある。

一方、華人の秘密結社として知られる義興（Ghee Hin）党とナコン国主との関係は、1821年のナコンによるクダー侵入以来以来すでに存在していた。例として1822年中頃にナコン国主ノーイがクダーにいる時、ペナンの警察官補佐官は、ペナン華人と部分的ではあるが、ウジュン・サラン（プーケット）の華人と秘密同盟を結んでいた。

また、事件からずっと後になった後にも同様の例が見られる。すなわち、1852年６月17日に福建宝石商人であるシム・イェップ（Shim yep、Sihimyen、Chao Shim Yip）から収集された情報が記録されている。シム・イェップの情報によれば、客家系結社の海山（Hai San）の頭領である Low Achong は、ナコンに行って、シャム当局にペナンの人々はそれほど多くないので、これはシャムがペナンを攻撃する良い機会ですと言った。［Musa 2003: 29］。

これらの交易商人、とくにウドムソムバット書簡にしばしば出てくる華人のアヘン密売船はシャムとクダーの双方の情報源となり得た。ペナンとクダーの初期の条約により、ペナンでのアヘン仕入れ価格が安かったことは、ソンクラーでのアヘン価格の安いことにも繋がり、アヘン禁制を堅く命じて居たシャムのラーマ３世王による、アヘン取り締まりの強化につながっている。ナコンのノーイが副国主に就任した1806年の命令書にもしつこくアヘン禁制が書かれている。ソンクラーの商活動の上手い領主がラーマ３世王に睨まれていたのは故ないことではない。彼らはその時々の情勢によって、どのような勢力にも加担した。

５.『ムソビシ』の英雄譚、とその物語化

最後に言及したいのは、このムソビシの時代の祖先や英雄、村の起源に関する口承伝統が「物語化」していまもなお生きているということである。Gullick はクダーのスルタン復権の交渉人となったトゥンク・アヌムについて、彼もすでに物語としての脚色がされていると指摘する。す

なわちトゥンク・アヌムは自分を支持する者をクバンパスの洞窟の秘密会議に集め、シャムへの攻撃を強めるように指示する。しかし自分自身の役割はあくまで秘密でならねばならないので、参加者はコーランに秘密の宣誓を誓う。そしてナコン国主への恭順の態度を見せながら、クダーの新しい国主になって欲しいとナコン国主ノーイから頼まれるが、それを辞退し、マラッカに追放されている元スルタンに手紙を送りスルタン位への復活を願った。Gullick はその「物語」の日付などが実際の事件よりもはるかに早すぎるという。

文書記録に登場する人物の場合でも、政治の中心に居なかった者についてはさらに注意深く検証しなければならない。

Yakob が1983年に発表したト・モーリスの物語は1974年８月のプルポック村での調査に基づいている。この論文におけるト・モーリスは村の英雄であるが、村にやってきたパタニ出身の武術の達人であり、呪術医（Bomoh）Idris の名前を持っていた。1816年のクダーによるペラ攻撃に参加し、1821年のムソビシの始まりのときにはシャム人の兵士を多数捕虜として処刑した。ゲリラ戦法でクダーを占領しているシャム人を悩ませたという。そして1843年にスルタンがクダーに復帰してまもなく老衰でなくなったとされる。子孫は代々この村に住む。村人は、クダーがシャムの朝貢国であった1909年まで、しばしばシャム人によって徴用があり、その時にこの村がシャム人を殺戮したト・モーリスの村であるということを知られるのを恐れて、村外には知られないようにしてきたと述べる。しかしこの1974年の段階でもすでに英雄譚としての脚色や口承の脚色が加わっていると述べている［Yacob 1983］

今、「英雄」ト・モーリスの物語はさらなる「進化」を遂げている。村の起源や英雄に興味を持つようになった若い世代が積極的にネットをつかって祖先の物語や子孫を探し集っている状況が21世紀以降目につくようになった。そこではト・モーリスを扱ったものもいくつか散見できるが、たとえばあるブログではト・モーリスの血統はムガール帝国の創始者にさかのぼると説明されて変容を遂げている。

他の「英雄譚」ではもっと極端な例も見られる。史実としては明らかに間違いであるが、民間での支持をえて、広まり続ける「物語」もある。このような「いまもなお生きている」民衆の歴史はなにを表すのか。研究者が解明して示す「史実」に満足しない人々による「歴史の実践」が持つ意味はまた現代を映す鏡である。

参考文献

１）タイ語文献

Damrong rachanuphap、Somdet Caophraya、1963. *Phraratcha Phongsawadaan krung Ratanakoosin thi 2*（『ラーマ II 世王年代記』）、Bangkok、Ongkankha Khrusaphaa.

Krom Simrapaakon、1963. *Ruang Tang Cao phrayaa Nakhonsiithammaraat: Prachum phongsaawadaan vol.73*（『ナコンシータマラート国主の任命記録』史料集成 No.73）、Bangkok.

Udomsombat（Can）、Luang 1972. *Cotmaai Luang Udom Sombat*（『ウドムソムバット書簡集』、Bangkok.

２）マレー語文献

Ismail Haji Saleh、1977. *Perang Musuh Bisik dalam Warta Darulaman*（ムソビシの戦い）. National Arkib Kedah、Malaysia.

Mahani Musa 2003. Kongsi Gelap Melayu di Negeri -Negeri bi Utara Pantau Barat Semenanjung Tanah meluyu. 1821 hingga1940-an、(Malay Secret Societies in the Northern Malay States 、1821-1940’)、MSRAS Monograh 、JAMBRAS、Kuala Lumpur.

Yacob、Muhamad、1983. “Pahlawan Tok Moris”、Khoo Kai Kim ed. *Beberapa Aspek Sejarah*

Kedah（「英雄ト・モーリス」『クダーの歴史的側面』、Persatuan Sejarah Malaysia、Kuala Lumpur.
３）英語文献
Anderson、John、1824（rep 1989）. *Political and Commercial Considerations Relative to the Malayan Peninsula*、MBRAS、Kuala Lumpur.
Burney、Captain Henry、1911. *Burney Papers*. Bangkok、Vajirayana National Library、5vols.
Gullick、J.M.1983.”Kedah 1821-1855: Years of Exile and Return”、*Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* Vol. 56、No. 2（245）、31-86.
Burney Treaty between the King of Siam and Great Britain June 20、1826.（https://en.wikisource.org/wiki/Burney_Treaty 2020/09/30閲覧）
Low、James. 1840.“An Account of the Origin and Progress of the British Clonies in the Staraits of Malacca”、*Journal of Indian Archipelago* Vol.3、601-604.
Newbold、T.J.、1839（rep1971）. *Political and statistical account of the British settlements in the Straits of Malacca*［*by*］、*with an introd. by C.M. Turnbull*、*vol.2*. Oxford Univ Press、Singapore
４）和文文献
黒田　景子 1986.「ソンクラー国年代記訳注（下）」、『南方文化』、天理南方文化研究会、13巻 、105-130）、天理 .
黒田　景子、2001.「マレー半島の華人港市国家」『岩波講座東南アジア史4　東南アジア近世国家群の展開』（桜井由躬雄編）、岩波書店、東京
黒田 景子、2018.「コタムンクアンのシャリフ・アブ・バカール・シャーとシャム語話者の世界 - マレー半島中部の口承伝承とその可能性」『南方文化』第45輯、43-78.
マクニール .W.H. 1975、日本語訳　佐々木昭夫　『疫病と世界史』、新潮社、東京 .
信夫清三郎、1943（rep 1963）.『ラッフルズ伝』日本評論社、東洋文庫、東京

Era of “Musuh Bisik” : the occupation of Kedah by Siam from 1821 to 1842（part.2）

Keiko KURODA

Keywords: Kedah, Nakhon Si Thammarat, the practice of history

This article is the second half of the second issue of the paper.

In the middle of the Malay Peninsula in the early 19th century, Penang, a powerful trading center of the British East India Company (EIC), attracted the surrounding port cities, including the opium trade. Noi, the politically powerful lord of Nakhon Si Thammarat, a prominent port city in southern Siam, also planned to expand his influence to the west coast of the peninsula.

According to the textual sources, Nakhon Si Thammarat occupied Kedah on 21 November 1821 and brought back many prisoners. According to Thai sources, Nakhon Si Thammarat considered Kedah’s failure to pay tribute to the Bungamas and the Burmese assistance in clearing Siam as reasons for punishment of the Central Court of Siam. On the other hand, for Kedah and Penang EIC, the attack of Nakhon Si Thammarat was a surprise attack, and the Kedah Sultan fled to Penang and a large number of refugees flowed in from Kedah. There is a discrepancy between the Siamese perception of the incident and the perceptions of Kedah and EIC material; Kedah and EIC assert that it was the plan of Noi in Nakhon Si Thammarat. The Nakhon Si Thammarat was approved by the Siamese court to take Kedah and further south, Perak, as its own direct territory, and blocked the movement of the rival port city of Songkhla lords.

The period of occupation of Kedah by Nakhon Si Thammarat from the attack on Kedah in 1822 to 1844 is called the “Musuh Bisik era” in Kedah, and the historical memory of the ordeal is still passed down as an inland farming tradition that has no written record. Under the rule of the Buddhist lordship of Noi’s sons, anti-Siam movements grew in Kedah, which led to a series of uprisings by the relatives of the Kedah sultan and people immediately after the occupation.

The Tunk Kudin’s Rebellion (1832), an anti-Siam uprising to retake Kedah, failed, but the rebellion with Mohamad Saad in 1838-39 extended to the siege of Songkhla and approached a part of Patani. On the other hand, Wan Mat Ali fought against the Muslim soldiers of Siam in the waters around Langkawi on the west coast. In this battle, Jihad was shouted and some Muslim warriors from outside of Kedah joined the Muslim Volunteer Force, and the war ended in the siege of Songkhla.

This rebellion was suppressed by the counterattack of Nakhon Si Thammarat’ s army, but the capital city’s King Rama III was displeased that the situation in the south was not communicated to the capital city and that the southern lords were involved in the forbidden opium trade through intelligence gathering and that they deliberately did not provide information.

Then, with the sudden death of Noi in 1839, the tide changed. Siam Central gave up the Malay Muslim rule of Kedah by the Buddhists; Kedah was divided and returned to the Sultan’s relatives and the Sultan as ruler.

Many memories of this “period of Musuh Bisik” survive, including the village heroes who

took part in the battle. Few of them have been documented, unlike the detailed records collected by the EIC. However, the memory of the anti-Siam rebellion in the village remained in the village and was passed on.

This "non-written historical memory" of the people's memories contains important information for the history of Kedah.

A survey of memory lore in the rural inland areas revealed that rural Malay Muslims who experienced Musuh Bisik had the following historical perceptions. The first is the long-lasting fear and ill feelings about Siam. The second is that the occupation of Musuh Bisik by the infidels was the impetus for the Muslim warriors of the Malay world to join as a volunteer army from Acheh, Patani and others, giving rise to the fight as anti-Siam and jihad. Finally, the heroic tales of "Musuh Bisik" handed down in the form of unrecorded historical traditions, some of which have evolved into tales of leaps and bounds, show that the Kedah people are conscious of "the era of Siamese and British colonialism" and are seeking "our own history" which is not official history. It was. The meaning of the "practice of history" by those who are not satisfied with the "historical facts" that researchers have elucidated and shown is also a mirror of the present day.